

別添 4 - 6

IPE（多職種連携教育）、IPW の実際と課題

分担研究報告書

IFE（多職種連携教育）、IPW の実際と課題

分担研究者：鶴岡浩樹（日本社会事業大学大学院・福祉マネジメント研究科・教授）

研究要旨

高齢障害者の看取り支援については、全国的に標準化されたものは見当たらず、黎明期といえる。令和5年度から6年度に実施した「障害者支援施設や共同生活援助事業所、居宅支援における高齢障害者の看取り・終末期の支援を行うための研究」では成果物として看取りマニュアルを作成した。本研究は、作成した看取りマニュアルの実装に向けて、看取り支援の核となる多職種連携（Interprofessional Work:IPW）および多職種連携教育（Interprofessional Education:IPE）に関する知見を整理することを目的とした。具体的には教科書的に確立されているIPWおよびIPEの理論をまとめ、IPWの実践に必要なコンピテンシーについて整理し、検討委員会での意見交換を踏まえて考察した。IPWの実践には、異なる職種、異なる立場の人たちが一堂に集まって同じテーマで学び合うIPEの取組みが重要である。IPWに必要なコンピテンシーにはコミュニケーション、リーダーシップ、マネジメントなどがあげられているが、中でもリフレクション（省察）やファシリテーションが大切であると思われる。高齢障害者に関わる事業所は、多職種多機関が交流する勉強会（IPE）を行うことで、看取り支援は一步前に進むと思われる。看取りマニュアルを活用することで共通言語や共通認識を育み、地域の看

A. 研究目的

高齢障害者の看取り支援については、全国的に標準化されたものは見当たらず、黎明期といえる。一方、高齢分野では緩和医学の進歩と在宅医療の普及、さらには介護保険サービスの質の向上や地域包括ケアシステムの構築により、末期がんに限らず、様々な疾病の看取り体制が確立されつつある。

本研究班は令和5年度から2カ年計画で「障害者支援施設や共同生活援助事業所、居宅支援

における高齢障害者の看取り・終末期の支援を行うための研究」を実施し、その成果物として看取りマニュアルを作成した。

本研究は、作成した看取りマニュアルの実装に向けて、看取り支援の核となる多職種連携（Interprofessional Work:IPW）および多職種連携教育（Interprofessional Education:IPE）に関する知見を整理することを目的とした。

B. 研究方法

教科書的に確立されている IPW および IPE の理論をまとめ、IPW の実践に必要なコンピテンシーについて整理し、検討委員会での意見交換を踏まえて考察した。

1) IPW/IPE の教科書の整理

教科書については、わが国の IPW/IPE を牽引してきた埼玉県立大学が刊行するテキストを中心に整理した。

2) IPW に必要なコンピテンシー

埼玉県立大学の教科書に記載のあるコンピテンシーのほか「多職種連携コンピテンシー開発チーム」によるものを探索し整理した。同チームは、2012（平成 24）年度から多職種連携コンピテンシー開発に関わってきた日本保健医療福祉連携教育学会（JAIBE）の IPE 推進委員会、2014（平成 26）年度から三重大が文部科学省より委託された「成長分野における中核的人材養成の戦略的推進事業」が協働して多職種連携コンピテンシーの開発を行うことに合意し、8 領域の学会および職能団体の協力を得て開発されたものである。その 8 つの学会および職能団体とは、日本医学教育学会、千葉看護学会、日本歯科医学教育学会、日本薬学会、日本理学療法士協会、日本作業療法士協会、日本栄養学教育学会、日本社会福祉学会である。このコンピテンシーは 2016 年 3 月に刊行されたものである。

3) 検討会での意見交換会

上記により整理した IPW/IPE の理論とコンピテンシーについて、2026（令和 8）年 1 月 19 日に開催された第 2 回検討委員会で報告し、意見交換の内容を踏まえ、看取り支援の核となる IPW/IPE の実践に向けて現状での課題について考察した。

本研究の意義は IPW/IPE の視点から参考となる知見を収集し、課題を抽出することで看取りマニュアルの見直し作業に役立てることである。

C. 研究結果

1) IPW の概要

福祉や介護の現場で多職種連携、多職種協働、多職種多機関連携などの言葉が語られるようになり久しい。2000 年に介護保険が始まって以降の日本における多職種連携の理論や実践は、英国で生まれた Interprofessional work

(IPW) の考え方が基本となっている。略語の IPW は「アイピーダブリュ」と発音する。interprofessional という言葉は英国で生まれた造語である。inter は「2 つ以上の」「～の間」「相互に」などを意味し、professional は、専門家や職業人などを意味する。この 2 語を合体させて interprofessional とした。英国専門職連携教育センター（Center for the Advancement of Interprofessional Education: CAIPE）によれば、IPW とは「専門職が相互作用しあう学習の上に成り立つ協働関係」としている。ここでいう専門職とは、ケアマネジャー、介護福祉士、医師、看護師、保健師、薬剤師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、社会福祉士、精神保健福祉士、医療ソーシャルワーカー、ヘルパーなどを指している。

IPW の定義については、埼玉県立大学が示した内容がわかりやすい。IPW とは「複数の領域の専門職者（住民や当事者も含む）が、それぞれの技術と知識を提供しあい、相互に作用しつつ、共通の目標の達成を患者・利用者とともに目指す協働した活動」である。ここで大事なことは、カッコ内に示された「住民や当事者も含む」という考え方である。

IPW を円滑に実施するためには、トレーニングが必要である。そのトレーニングのことを、Interprofessional education (IPE) という。IPE は「アイピーイー」と発音する。CAIPE は IPE を「複数の領域の専門職者が連携およびケアの質を改善するために、同じ場所とともに学び、お互いから学び合いながら、お互いのことを学ぶこと」と定義している。IPE で大事なことは、違う職種、違う立場の人たちが一堂に集まって、一緒に同じテーマで学び合うということにある。対話しながら異なる専門職の価値観を受けとめ、噛み合わせながら、学ぶのである。

2) チームの種類

福祉・介護・保健・医療などの現場におけるチームは、以下の 3 種類に分けられる。

① マルチディシプリナリーモデル

複数の専門分野の専門職が、分野間の独立を保ったままアプローチするというモデルである。救急医療の現場が該当する。

② インターディシプリナリーモデル

複数の専門分野の専門職が、お互いに連携し

ながら実践を進める。目的に向かって話し合い、重なるケアと異なるケアを認識しながら実践する。リハビリテーションの現場が該当する。

③ トランスディシプリナリーモデル

複数の専門分野の専門職、当事者、家族が、それぞれの専門や経験を融合させ、実践する。役割の開放、役割共有、役割交代などが起こる。在宅ケアにおけるチームがこれにあたる。

3) 埼玉県立大学のコンピテンシーモデル

① 対人援助の基本となる力

セルフコントロール、コミュニケーションスキル、リフレクションの3つがある。

(a)セルフコントロールは：自分の気持ちを整えることを意味する。

(b)コミュニケーションスキル：アイコンタクト、傾聴、共感、言葉遣い、繰り返し、伝え方など様々なコミュニケーションスキルを駆使する。

(c)リフレクション：実践の経験を振り返り、吟味するプロセスのことである。リフレクションについては IPW/IPE で重要なコンピテンシーと思われ、詳しく後述する。

② 多職種と協働する力

多職種と協働する力には、パートナーシップ、情報共有、相互支援、チームのリフレクションがあげられる。

(a)パートナーシップ：対等な人間関係を構築し維持することを意味する。

(b)情報共有：専門職だけでなく利用者は家族もメンバーであり、わかりやすい言葉で、伝達していく必要がある。

(c)相互支援：「情緒的サポート」「肯定的フィードバック」「士気の高揚」がある。

(d)リフレクション：チームとしてどうだったのか振り返り吟味することが、次の実践に役立つ

③ チームを動かす力

チームを動かすには、リーダーシップを持った人、マネジメントできる人、コーディネーションができる人、ファシリテーションができる人が揃うと良い。

(a) リーダーシップ

チームを動かすには、リーダーシップを持った人、マネジメントできる人、コーディネーションができる人、ファシリテーションができる人が揃うと良い。

(b) マネジメント

マネジャーはリーダーが掲げた目標を実現するために、チームをマネジメントする人。

(c) コーデシネーション

調整機能を意味する。多職種間の意見調整や、行動の優先度の調整、ケアカンファレンスの日程調整など、IPWには様々な調整が必要となる。

(d) ファシリテーション

IPWを促進させる機能をファシリテーションという。ファシリテーションはチームを動かすために、IPWでは重要視されている。

4) 多職種連携コンピテンシーモデル

「多職種連携コンピテンシー開発チーム」によれば、保健医療福祉に携わるどの専門職にも必要なコンピテンシーは以下の6つに集約される。

① 患者・利用者・家族・コミュニティ中心の思考と行動ができる

② 職種間コミュニケーションができる。

③ 職種役割を全うする

④ 多職種を理解する

⑤ 関係性に働きかける

⑥ 自職種を省みる

中心となるのが「患者・利用者・家族・コミュニティ中心」と「職種間コミュニケーション」がコアとなるコンピテンシーで、周囲の「職種役割を全うする」「他職種を理解する」「関係性に働きかける」「自職種を省みる」の4つが中心を支えるコンピテンシーである。「職種間コミュニケーション」がスムーズだと連携が良いと思われるが、利用者や家族が置き去りにしている場合がある。よってこのモデルでは中央に位置している。中央が抜けたドーナツ現象を起こしてはならない。「職種役割を全うする」は専門職として自分の仕事をしっかり行うという意味である。「自職種を省みる」はこれまで何度も出てきたリフレクションのことである。「関係性に働きかける」は、チームのダイナミクスを意味する。チームメンバーが変わると、方針が大きく変わることがある。IPWは構成メンバーによって、様々な方向に向かう可能性が秘めており、これが「関係性」である。関係性を見抜き、ファシリテート力を駆使して最良の方向に導く必要がある。

5) リフレクション

これまで何度も出てきたリフレクションに

について整理する。

リフレクションとは実践の経験を振り返り、吟味するプロセスのことである。近年、介護・福祉・保健・医療の分野で重要視されている。英語の reflection が原語であり、日本では様々な言葉で紹介されている。多くの分野で「省察」と表記し、「しょうさつ」もしくは「せいさつ」と読む。正式には「せいさつ」だが「しょうさつ」と発音する学者や実践家も多い。簡単に「振り返り」と称する場合もある。ビジネス業界では「内省」という言葉が用いられることが多い。看護分野では、カタカナ読みで「リフレクション」と表記することも多い。リフレクションによって、人としての成長につながる、専門職として成長につながる、ベテランにとっては難しい習慣的行為からの脱却ができる、不確実性の多い事柄に対応する力をつけられるなど、得られるものは多岐にわたる。

7) 意見交換会

2026 (令和 8) 年 1 月 19 日に開催された第 2 回検討委員会で報告した。ひとつの職種だけでなく、異なる職種、異なる立場のメンバーがごちゃまぜとなり、対話しながら学び合うことで相互理解が深まり IPW の実践につながることが IPE の特徴として取り上げられた。特に医療系大学の卒前教育では、関係する学部の学生達が一堂に集まって学ぶ IPE が実践されており、このような教育を受けた専門職が現場に出始めていることについて紹介した。詳細については、考察に記述する。

D. 考察

本研究では、高齢障害者の看取り支援の核となる IPW について、その概念と実践に必要な子コンピテンシーについて整理した。IPW の促進には IPE が重要であり、卒前教育と卒後教育における IPE の実践が看取り支援を向上させるものと思われる。

コンピテンシーについては、コミュニケーション力だけでなく、実践を省察する力が重要であることが明らかとなった。チームを動かすには、リーダーシップやマネジメントの力が必要であるが、特に大事なコンピテンシーとしてはファシリテーション力であることも特記しておきたい。

第 2 回検討委員会で報告した医療系大学の

卒前教育について詳細と考察を記す。医療系大学では、10 年以上前から医学部・看護学部・薬学部・栄養学部・リハビリテーション学部介護福祉学部・社会福祉学部等の学生達が一堂に集まってグループワークで学ぶ IPE が実践されている。学生時代から学部を超えてパートナーシップを結ぶトレーニングがなされており、このような教育を受けた専門職たちが現場に出始めている。医療系大学は IPE がカリキュラムに組み込まれているため単科大学においても、他大学と共同して IPE の授業を実施している。一方、福祉系大学では、積極的に IPE の演習授業を取り入れている大学以外では、総合大学でなければこのような教育をすることはできない。IPW については、ソーシャルワークの得意とするスキルであるが、医療系と福祉系の教育内容の違いにより、10 年後には現場の専門職のスキルに差が出てくることが予想される。卒前教育を変えることは難しいが、卒後教育については今日からでも IPE の実践が可能である。高齢障害者に関わる事業所は、多職種多機関が交流する勉強会、すなわち IPE を行うことで看取り支援は一步前に進むと思われる。その際、作成中の看取りマニュアルを使うことで、地域で看取りに対する共通言語と共通認識を育み、マニュアルの更新作業にも役立つことと思われる。

E. 結論

本研究により、高齢障害者の看取り支援の核となる IPW の実践には、IPE の取組みが重要であることを文献から明らかにした。IPW に必要なコンピテンシーを整理する中で、リフレクション (省察) が重要であることが浮き彫りとなった。またチームを動かすコンピテンシーでは、ファシリテーション力が必要である。

高齢障害者の現場においては、今日からでも IPE の実践が可能である。高齢障害者に関わる事業所は、多職種多機関が交流する勉強会、すなわち IPE を行うことで看取り支援は一步前に進むと思われる。そこで看取りマニュアルを活用することで共通言語や共通認識を育み、地域の看取り支援の質の向上につながることを期待される。

【文献】

- 1) 埼玉県立大学編：IPW を学ぶ. p41, 中央法規, 東京 (2009)
- 2) 埼玉県立大学編：新しい IPW を学ぶ. 中央法規, 東京 (2022)
- 3) 東めぐみ:看護リフレクション入門. p32, ライフサポート, 横浜 (2009)
- 4) 多職種連携コンピテンシー開発チーム：医療保健福祉分野の多職種連携コンピテンシー. p11 (2016)
- 5) 井上由起子、鶴岡浩樹、宮島渡、村田麻起子：現場で役立つ介護・福祉リーダーのためのチームマネジメント. P126-137, 中央法規, 東京 (2019)

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし